おしゃべり美術部レター

Vol. 1
2024年8月4日
本郷新記念札幌彫刻美術館

【本郷新の言葉】
「絵や彫刻を鑑賞する能力は、元来誰にでも与えられているものなのである。絵や彫刻を創作する能力は、誰にも等しくと言う訳には行かず、多少素質と言うものに関係しているが、理解したり、楽しんだり、批判したりする力は、誰でも、より多く接するに従って出てくるものである。だから花一つ描けず、風景の一枚も描いたことのない人でも立派に美術批評を書いている人があるのである。」―本郷新「美術について」書名不詳、一九四六年

札幌おしゃべり美術部、初開催

鑑賞ワークショップ「札幌おしゃべり美術部」が令和六年八月四日（日）本郷新記念札幌彫刻美術館で開催されました。美術作品の鑑賞をみんなでおしゃべりしながら楽しむ会で、最後は作品の批評を書くことに挑戦するものです。

顧問の梅村尚幸学芸員は、札幌には制作者がそれなりに居るのに対し、鑑賞者・批評者が圧倒的に少ないことに着目しました。実際、シンポジウム「アーティストと語る、札幌の今」（SCARTSスタジオ・二〇二四年二月二四日）にて、アーティストの平川紀道氏が「作品を見てくれる人はたくさん居るのに、感想が聞こえてこない！」と嘆いていたのが印象的でした。

札幌市では、市内の小学五年生を美術館に招待し、対話による鑑賞教育を行う「ハロー！ミュージアム」事業が定着しています。しかし中学生・高校生に対してはあまりアプローチが出来ておらず、鑑賞から遠ざかっている人が多いのが現状です。そこで今回は中学生以上を対象とした、より発展的な内容での鑑賞ワークショップを企画・実践することにしたのです。未来の鑑賞者・批評者を発掘・育成することで、札幌のアートシーンを盛り上げようとする試みです。

イラスト制作：札幌西高等学校美術部三年　小野寺凛

活動の流れ

一、対話鑑賞

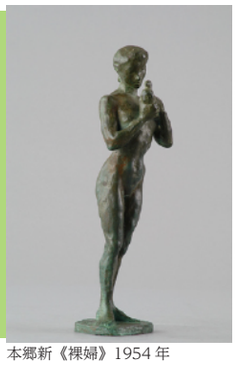
・目の前の作品をよく観察してみよう…近くでみる、遠くからみる、いろいろな角度からみる。
・作品の形、素材、色など、目に見えたことをみんなで指摘し合ってみよう。
・この作品について感じたこと、考えたことについて、みんなで自由に話し合ってみよう。

【ポイント】なぜ自分はそう考えたのか、理由を具体的に説明すると他人に伝わります。
（例）「作者はこの人物像で悲しみを表現したかったのだと思います。なぜなら眉毛や口元がたれ下がっていて、暗い表情をしているからです」

二、自由鑑賞

・美術館の展示を自由に鑑賞してみましょう。
記念館「コレクション展」
本館「共振―本郷新 ＋ 北海道の現代アーティスト」
・好きな作品や気になる作品をいくつか見つけよう。
・もちろん作品単体だけでなく、展示の内容や作品の配置、建物、歴史的背景などに注目しても良い。

（裏面に続く！）


本郷新《裸婦》1954年

梅村「本郷新の《裸婦》について何か感想はありますか？」
Yさん「女性が鳥をやさしく握っています」
梅村「女性と鳥の関係性は？美味しそうだから食べちゃいたいって思って微笑んでいるのかね？」
Yさん「いいえ、きっとこの女性は鳥の飼主です。愛情がなければこんな優しい表情と持ち方はできません！」
Sさん「私はこの女性のたくましい身体付きに注目しました。特に下半身が屈強ですね」
梅村「おしりもすごく突き出てますね」
Yさん「この人はきっと筋トレしているアスリートなんです」
梅村「小さくて、形もデフォルメされているのに、よく見ると色々なイメージが湧いてきますね」

参加者

顧問：梅村尚幸
（本郷新記念札幌彫刻美術館学芸員）
私は小学生の頃、漫画家を目指して漫画を描きまくっていましたが、中学生で自分の才能の限界に気が付きました。でも、今は美術の仕事をしています。鑑賞は誰でもできますし、一生の趣味にすることもできます。

Yさん
（札幌市立琴似中学校３年生）
今は特に夢や目標はないけれど、札幌アート・コミュニケーターズとして活動している母が「きっと勉強になる」と送り出してくれました。

Sさん
（京都芸術大学　通信教育）
日本在住歴の長い台湾人。かつてはデザイナーを目指していたけど、今は学芸員になるための勉強をしています。人生は何歳からでもチャレンジできる！

三、鑑賞ノート作成

・気になる作品について、鑑賞ノートを作ってみよう。
・対話鑑賞で話したようなことを、今度は書いてみるのです。

【ポイント】作品の形、素材、色、置かれている場所は？この作品は何を表現している？この作品のどこが面白いのか？どこが気になるのか？その理由は？

・説明パネルなどを読んでもいいですが、それを丸写しするのは×
・作家の言葉は重大なヒント。でも、それだけが答えではない。作家の言葉を読んで、自分が感じたことを素直に書いてみよう。

四、発表・講評

・鑑賞ノートにもとづいて、みんなの前で発表してみよう。

五、作品解説（批評）を書こう

・なぜ美術について書くのか？…書くことは、自分自身の勉強になる。作品について理解が深まる。そして作品の面白さを人に伝えることができる。
・今回は２００～３００字の作品解説（批評）に挑戦してみよう！

★批評の書き方（梅村方式）

・読み手を意識しよう！…この解説は誰が読むのか（親、先生、友達、来館者）想像して、その人に伝わるように書く。
・批評とは、作品にいちゃもんを付けることでは決してない。（大人でも勘違いしている人がたくさんいる）
・批評とは、芸術作品の中に息づく興味深いものごとへ、私たちの注意をうながすものである。（作品の価値の発見）
・批評と感想文の違いは？…批評は、自分の感想だけでなく、その感想の根拠となる事実が合理的に書かれているものである。
・自分の感想や解釈とは…
（例）「作者はこんなことを伝えたかったのかもしれない」「私はこの作品からこんなことを想像した」
・解釈の根拠を明確にしておくと、立派な批評になる。根拠は主として、作品そのものの中に見いだされる。
（例）「眉毛や口元がたれ下がっており（根拠）、悲しみが表現されている（解釈）」
・解釈の根拠を、歴史的・社会的背景から示す方法もあるが、作品そのものから離れすぎるとフワっとした内容になりがちなので注意。
・事実の記述はダラダラ書かない。説明したいポイントに絞って書く。

開催中の展覧会
「共振―本郷新 ＋ 北海道の現代アーティスト」2024.6.15-9.16

彫刻家・本郷新（1905-1980）と、地域の現代作家がコラボ。立体造形、短歌、写真、アニメなど様々なジャンルの作家が本郷新の作品と向き合い新作を制作しています。

参加者による批評

●小さな手と大きな手がある。二つの手は家族の手なのではないかと思った。上が子供、下がお母さん・お父さん。子供の指先と大人の指先が当たっているところがある。そこにもやさしさが見られた。手首のほうはどちらもほんのりピンク色になっている。そこに温かみを感じた。この作品から、手の大きさは違うけれどいのちの重さや大事さは同じだし、いのちが重たくない人なんていないし、大事なことだとわかった。（Yさん）

井越有紀《手と手》2024 年
クスミエリカ撮影

●「大志の誓い」―佐藤壮馬の《16.APRIL》

北海道の人ならだれでも一度耳にしたことがあるクラーク博士の名言「BOYS BE AMBITIOUS」が、切り貼りされた新聞の中に大きく書かれているのだが、なぜか「BOYS」のみに削除の線を引いている。さらに観察すると、作者の意図が少しずつ見えてきた。あちこち貼られている「ウルトラマン」の写真や、「空気を変える」「言葉を変える」などの見出しがずらりと並んでいることで、「BOYS」という用語に疑問を抱いているのではないだろうかと感じさせる。また、作品の前に置かれていた本郷新の小さな彫刻《女》と合わせて見ると、過去の時代の女性の立場と現代社会と比べて、今後どう変わって変えていくのかも考えさせられる。（Sさん）

佐藤壮馬《16.APRIL》2024 年
クスミエリカ撮影

本郷新《女》1961 年

実践を終えて

夏休み中の中高生は忙しく、思うように人を集められませんでしたが、小規模ながら濃密な対話が出来ました。参加者からは、普段話しができないような他の世代の人とお話ができて面白かったという感想も。楽しみながら鑑賞スキルをアップできた一日になったのではないかと思います。

今後はもっと参加者の対象範囲を拡げ、美術館で批評の渦を巻き起こしてみるのもいいかもしれません。次回の予定は未定ですが、また機会があれば！

（編集・執筆：梅村尚幸）